学内学術研究発表会発表要旨

法洲の祈祷念仏批判

―法然上人との比較を中心に―

髙橋昌彦

一、はじめに

法洲上人（以下諸師の敬称を略す）とは、江戸時代後期に山口県青海島西円寺に住持し念仏の教えをひろめた浄土宗僧侶である。この法洲（一七六五～一八三九）とその師法岸（一七四四～一八一五）と法洲の弟子法道（一八〇四～一八六三）を「大日比三師」と称している。この三師の講説遺稿を集めたものが『大日比三師講説集』である。このうち今回は、法洲述『講説大意』の中に書かれている、「祈祷念仏批判」を取り上げ、法然の説示と比較してみたい。

法洲が活躍された当時の時代背景について、深貝慈孝氏は、江戸時代徳川幕府の庇護のもとに僧侶達が堕落し、俗世と変わらぬ生活をおくっており、自行も化他もしていない状態であったと述べている。[1]江戸時代に入って寺檀制度が確立したことにより、寺院の経済的基盤は安定した。しかしその一方でそれによって僧侶の風儀が俗世のものと変わらなくなった。また名聞利養を求める僧侶も多く、その有様は世俗の世情に全く異なることなく、教団そのものも形式主義に陥っていき、退廃の道を辿っていく傾向にあったのである。[2]また井川定慶[3]氏、伊藤真徹[4]氏、長谷川匡俊[5]氏らは、江戸時代当時の仏教界における弊風について

・寺檀制度等の幕府の仏教統制政策から生じた、僧風の堕落及び教化活動の停滞。

・経文釈義に違った新義を立てることの禁止など、浄土宗法度等の諸法度による束縛から生じる弊害。

という問題を挙げている。[6]

また、中野隆元[7]氏は、「法洲の心配せられたることは、当時一般布教家の云っている、祈祷念仏の問題である」と述べ、大橋俊雄[8]氏は、「この念仏祈祷、現世利益の曲解が布教上重大な問題であった」として「祈祷念仏」・「現世利益」が当時の浄土宗内において問題であったと指摘している。

二、法洲の祈祷に関する説示

『講説大意』では、「祈祷念仏」に対して多くの紙面を割き、問答を通して批判を展開させている。『講説大意』における法洲の祈祷に関する説示をまとめると以下のようになる。

（A―1）【問】祈祷法がなければ災難魔障により念仏が怠惰するか？

【答】浄土宗の念仏は阿弥陀仏の本願他力の法であり、阿弥陀仏の光明による摂取護念があるので、災難魔障や横難横死がつけいる隙がない。（大益があり、釈尊・一切諸仏・一切諸菩薩の護念があるのだから祈祷をする必要は無い。）

（A―2）【問】祈祷法がなければ災難魔障により念仏が怠惰するか？

【答】祈祷をした為に悪趣に堕ちるわけではない。（ただ、祈祷した為に、本願に背き、本願に背いた為に、摂光護念を蒙らず、摂光護念の益を得ることが無い為に、罪業を滅することが無く、罪業を滅することがない為に、地獄に堕ちるのである。）

（A―3）【問】祈念祈祷は善事であるのに、なぜ往生の障りとなるのか？

【答】祈祷は善事であるが、祈祷を行う人は、厭欣心がなく娑婆に執着する心があるので、往生することができない。

（A―4）【問】念仏者が祈念祈祷した場合の往生はどうであるのか？

【答】現世祈願をしていた人が、臨終正念の往生を遂げたというのは、臨終廻心の往生というものであり、祈念祈祷の思いを断ち、ただ往生の為に念仏を称えたからである。

（A―5）【問】元祖が現世祈願に念仏を許し、三祖が余の仏神に祈祷を許して阿弥陀仏に申すのを誡めるはなぜか？

【答】①法然が現世祈願に念仏を許しているのは、まず念仏の一門に引き入れその後に総別二種の安心を示し、浄土往生させるための方便である。

【答】②良忠は、現世の祈りで、阿弥陀仏にお願いする時は、現世の祈りが往生を妨げないと、思い誤ることが多い。だから現世のことを、阿弥陀仏にお願いすることないようにと誡められている。たとえ現世に執着する輩であっても、現世の祈りを止めなくとも、阿弥陀仏

の御心に叶わないと云うことを知り、臨終に廻心して、往益を得ることが多い。だから、念仏によって祈ることを、誡められているのである。

（A―6）【問】念仏者に悪事災難があるのはなぜか？

【答】往生浄土のために念仏を称えた者は仏・菩薩の護念にあずかる。これを不求自得という。これに反して念仏を称えて現当二世安穏と回向すれば、浄土宗の安心とは異なり、浄土に往生することはできない。

（A―7）【問】決定業ならば祈るに益なき義を示していないのか？

【答】仏神は一切衆生が仏道に入り、出離生死、往生成仏の法を修することが本意である。仏は現世利益の法を説いて、その欲さえも利用して、仏法に入る為の方便としている。唯随自専修の正しい教えを講説すべきである。

＊法洲は、念仏は往生浄土の為の念仏であるとして、現世利益は不求自得であるとしている。そして法洲は、現世祈祷は娑婆執着の心であり、現世に縛る教えであると否定している。

三、法然の説示

法然の現世の祈りについての説示をまとめると以下の通りである。

（B―1）一心に阿弥陀仏を念じる者には、現当二世の両益がある。（『選択集』第十一章）

（B―2）念仏による罪障滅尽・随逐影護・延年転受などの現世利益を示し、往生浄土を願っての念仏には現世利益がある。（『選択集』第十五章）

（B―3）念仏の行は有智無智、善人悪人、持戒破戒、身分が貴いも身分が賤きも、男も女も分け隔てることなく、釈尊在世時の衆生、釈尊滅後の衆生、末法万年の後の三宝が全て失した後の衆生まで、念仏のみが唯一現当二世の祈祷である。（「鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事」）

＊法然は本願念仏と祈りについて、本願念仏は現当二世に通じる唯一の祈りであり、それに勝る祈りは存在しないとする。現益として、延年転寿や転重軽受や罪障滅尽や随逐影護があるとし、当益は往生浄土としている。現世利益は往生浄土を願って念仏している者に具わるものであり不求自得である。そして現当二世の祈祷となるのは唯一念仏だけであり、その功徳は分け隔てなく全ての人にあるとしている。

四、おわりに

法洲も法然もそれぞれ、念仏を往生浄土の為の念仏とすることは共通しており、現世利益を不求自得とすることも共通している。しかし法洲は「娑婆執着＝悪」と考え、娑婆に執着することが無いようさせるために現世利益を徹底的に否定する。法洲は「法然が現世祈願に念仏を許しているのは、まず念仏の一門に引き入れ、その後に総別二種の安心を示し、浄土往生させるための方便である」と語っているのに対し、法然自身は往生浄土を願って念仏する者には現当二世の両益があるとしている。

法洲は、法然の往生浄土の教えを継承しつつも、法然のような現世利益に対する寛容性はみられない。

法洲が現世祈祷に対して否定的な立場を取っていることの背景としては、法洲が布教活動した当時は、現世の祈祷が多くなされており、祖師の教えをまげて伝える者が多く存在していたことがあげられる。祖師の教えが曲がり伝わってしまう事を危惧した法洲は、法然の教えの本筋（往生浄土のための念仏）から外れることがないように厳しい態度をとっていたと考えられる。

註

(1)深貝慈孝「浄土宗捨世派における理論と実践」―特に関通流を中心として―四五七～四五八頁。
(2)阿川文正『大日比西円寺資料集成〈往生伝之部〉』四五七～四五八頁。
(3)井川定慶「江戸時代浄土宗の復古と革新運動」（『佐藤博士古稀記念　仏教思想論叢』。
(4)伊藤真徹『日本浄土教文化史研究』
(5)長谷川匡俊『近世浄土宗の信仰と教化』一三〇頁。
(6)この江戸時代の僧侶実情について、辻善之助氏等が、僧侶堕落論を提唱されている。
(7)中野隆元「浄土宗布教に関する法洲の所説」四六七頁。浄土学第二巻（五・六）
(8)大橋俊雄「大日比三師の往生論と往生伝」三四六頁。

（大学院仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻）